

ダヤク族の村を訪れて

井 上 真

はじめに

私は現在インドネシア共和国東カリマンタン州サマリダ市にある熱帯降雨林研究センターに JICA 長期専門家（アグロフォレストリー担当）として派遣されています。研究の内容は一言でいうと焼畑の比較研究で、サマリダ市周辺の移住民による集落（ペパー栽培により多くの現金収入を得ている）から、いわゆる伝統的焼畑を行う奥地のダヤク族の集落まで合計 6 集落を選び、2 年間かけて実態調査を行うというものです。今年度の調査予定 3 集落のうち既に 2 集落を終え、今は 3 つめの集落を調査しているところです。既に調査を終えたうちの 1 つが、端境期（伝統的焼畑からの移行期）にある集落のモデルとして選んだ Dayak 族の村です。Dayak 族というのはボルネオ島に住むプロトマレー系（形質的にはモンゴロイド）の諸種族の総称であり、私が調査したのは東カリマンタンの Dayak の中では最も人口が多いといわれる Kenya 族の村 Data-Bilang（ダタビラン）です。一連の調査結果については後日別の形で発表する予定ですので、本稿では Data-Bilang に限り、しかもほんのさわりの部分とレポートには書かないこと（こぼれ話他）を紹介しようと思います。

村の様子

サマリダから Data-Bilang へは平均すると 1 週間に 1 回、直通の乗合い船があります。朝 9 時頃にサマリダを発ってマハカム河本流を、Kota-Bangun, Merak, Long Iram（戦中はここがマハカム河流域では日本軍統治の最先端でした）と廻り、3 日目の夕方 5 時頃に目的の Data-Bilang へ着きます。直通の船がない時は Long Iram からクティンティン（モーター付きカヌー）に乗ります。この場合、朝 7 時頃に Long Iram を発つと昼前には Data-Bilang に着くことができます。船の中は大勢の人が所狭しと乗っているのも賑やかです。マンウォッチングや彼らとの会話も楽しみのうちの 1 つです。往復で 5~6 日は船の生活になるので、退屈するかしないかは工夫次第ということになります。

さて、初めて Data-Bilang を訪れたのは昨年（1987）の 10 月。ちょうど焼畑の草刈りの時期でした。昼は村に大人がいません。老人と子供だけです。大人たちが戻ってくる

INOUE, Makoto: Some Experiences in a Dayak Tribe Village

農林水産省林業試験場経営部, 現在 JICA 専門家としてインドネシア滞在中

のを待つ間少し散歩した時のことです。村はずれの細い道を歩いていた時、向こうから男の子が2人歩いて来ました。すると私たち（私、カウンターパート、Kenya 語の通訳）を見たときたんにマンガオ（長さ 50 cm ぐらいの刀）を抜いて立ち止ったではありませんか。通訳が先に進んで話しかけたところマンガオは抜いたままですが笑って通り過ぎてゆきました。ホッと一息つくと、次は老人です。両手で槍を持ち、先を私たちの方へ向けて近づいて来るのです。再び通訳の力に頼るしかありませんでした。あとで聞いてみると、ちょうどその時期は鬼（知らない人）が来て子供の首を狩るという言い伝えがあるのだそうです。大人たちが村にいないので非力な老人子供にとっては自分の身を守るための当然な行為であったのです。これが訪問初日の出来事ですから、Kenya 族に対する興味が増幅されないはずがありません。

Data-Bilang の Kenya 族の人々は元々 Apokayan（マレーシアとの国境近く）に住んでいました。彼らは塩その他の生活必需品を得るために数か月かかって下流の村やマレーシア方面へ旅をしては戻るとい生活をしていました。それならいっそのこと下流地域へ移住してしまおうと考えるのも無理ありません。多くの人が下流へ移住していくつかの村をつくりました。そのうちの一団が現在 Data-Bilang に住んでいる人々です。彼らの大部分は、1963年に Apokayan を出てから途中2〜3か所住む場所を変え（人により多少異なる）、1974年から Data-Bilang に住むようになりました。Apokayan の時は long house に住んでいた彼らも今では1戸1戸別々に家を建てて住んでいます。でも隣りの家に行くのにわざわざ地面におりなければならなくて少々面倒くさいと思っている人が結構いました。1974年以後も Apokayan その他から移住してくる家族があり、現在では戸数 204、人口 1,264 人という堂々たる村になっています。

この村にも当然ながら法的な村長（Kepala Desa）がいて、その下にいくつかの役職があります。しかし彼らの実生活においては法的（公的）行政組織と慣習的な組織が融合した形で村がまとめられています。慣習的システムでは、村で一番の権力者（酋長）を Kepala Adat といいます。つまり Apokayan にあるいくつかの村にはそれぞれ Kepala Adat がいたわけです。そして、それらの Kepala Adat の中の1人が Kepala Adat Besar（大酋長）となり Apokayan 全体、つまり Kenya 族全体をまとめていたわけです。しかし、現在は下流に Kenya 族の村がいくつかあります。そこで彼らは Apokayan 以外の Kenya 族の大酋長を選びました。Data-Bilang の法的な村長さんが、この Kepala Adat Besar なのです。したがって現在は Kenya 族の大酋長が2人いることとなります。1人は Apokayan に、もう1人は Data-Bilang にです。さて現在の Data-Bilang にも Kepala Adat はいます。しかし、あくまでも法的な村長より下位に位置づけられていて、慣習法に基づいた裁判長のような働きをしています。たいていのいざごは、Kepala Adat の力量で解決されているようです。また、村長及び Kepala Adat は住民の代表者たち（長老たち）と必要に応じて会議を開きます。この代表者の組織は慣習的なものですが、現在の村長の下にある公的な役職の長はこの代表者たちの中から選ばれています。

村の行政組織が慣習的組織と融合したものであることがわかりでしょう。

土地保有と焼畑

法的には森林は国有ですが、彼らの焼畑は黙認されています。ですから慣習的な土地保有システムが彼らにとっては重要な意味をもってきます。まず一番最初に原生林を伐って焼畑をやった人がその場所の保有権を得ます。ですから、村に長く住んでいる人はいくつもの土地（つまり広い面積）を保有できることになるわけです。しかし、最近移住してきた人は既に近くの原生林は伐られてしまっているので、焼畑用地を求めるのに苦心します。遠くまで出かけて行って原生林を伐るか、あるいは他人（兄弟や親戚）から借りるかしなければなりません。借りの場合、その代償は必要としないものの毎年保有者に許可をもらわなければなりませんし、保有者が拒否すれば使うことができません。土地利用権は不安定であるといえます。Data-Bilang から他の所へ移住していった人の土地を使っている人もおりますが、もしも元の保有者が戻ってきたら話し合っただけで利用方法を定めることになります。あくまでも一番初めに原生林を伐った人に保有権があるからです。相続に関しては、基本的には親と一緒に住む子供が相続権を得ることになっています。しかし、親の考え次第で他の子供にも土地の一部を分け与えることがあります。いずれにせよ、長子であるか否か男か女かによる差別はありません。

焼畑については少々おもしろい事実がわかりました。彼らは収穫跡地の植生を4種類に区別しているのです。収穫後1年間を“Bekan”（Kenya語で「跡」の意）といいます。それ以後は年数ではなくて二次林（Kenya語で“Jakau”）の遷移にしたがってJakau“Metan”（「気絶」の意）、Jakau“Buet”（「小さい」の意）、Jakau“Buteq”（「立つ」の意）と区分します。詳細は省きますが、彼らは極力Jakau Buteqになった林だけを伐るようにしています。Jakau Buteqは立派な二次林として考えられ、Apokayanではだいたい8～10年ぐらい、Data-Bilangでは4～6年ぐらいでJakau Buteqになります。Data-Bilangという名は「肥沃な平地」を意味し、森林の再生はきわめて早く、したがって休閑期も短くてすむというわけです。熱帯の土壌は浅く森林としての養分の大部分が植物体に含まれること、及び土地により森林再生のスピードが異なることを考えると、年数でなく森林の大きさで休閑期がきまってくるというのは非常に合理的なものといえるでしょう。

また、1年に同時に2か所焼畑をつくる人もいます。その場合、大きい方を“Uma-biuq”小さい方を“Kelimeng”といい、後者には主にモチ米を植えます。田植えは少し早目にやり、早目に収穫して、収穫前の祭り（“Ramei Ubek”）の時に食べるのです。その他、農作業のときの労働形態にもいくつか種類があり、相互扶助のしくみがしっかりとできています。（詳細はすべて別稿に譲ることにします）

人々の生活

彼らは森林と強いつながりをもって生活しています。焼畑、燃材、狩猟（イノシシが

多い)をはじめ、籐、果物、ハチミツ、キノコ、香木などの林野副産物を採取しています。特に香木や籐は現金収入源ともなります。ジャワ人とちがって彼らは Pekarangan (home garden) よりむしろ焼畑の pordok (仮小屋) の回りに多くの tree crop や野菜類を植え、焼畑の作業がない時でも頻繁に pordok へ通うのです。その道すがらキノコや食用の草葉を採って帰るのはいうまでもありません。私の見たところ彼らのタンパク質摂取量は極めて少なく、草類(野菜、木の葉、キャッサバの葉、バナナの花など)も大目の水で茹でたものをおかずにするだけです。また多くの人がおしりを床につけないですわった姿勢(日本人式トイレですわる形)で、しかも薄暗い所で食事をとります。体格自体は私より1回りも2回りも小さいものの、筋肉質でガッシリした体つきです。少々驚いたのは、日本の味の素が彼らの必需品となっていることです。米と草は自給ですが、塩、砂糖、味の素などは村の店で買います。米を使って買う人もいれば現金で買う人もいます。現在、クティンティンで2時間ぐらいのところにある川原で砂金を探す人も結構多く、これが彼らの現金収入の大部分を占めています。たいていは焼畑の作業がない時に出かけてゆき1~2週間して村に戻って来るパターンですが、なかには妻子を村に置いたまま長期間砂金探しを続ける若い男もいます。もっとも、これは妻子が親夫婦と一緒に住んでいる場合に限られるのですが。ですから、日本の単身赴任とは少々趣きが異なるわけです。

貨幣経済の浸透により彼らの生活がどう変化していくのかわかりません。変化は止められそうにありませんから、ただなるべくゆっくりと、なるべく自然に、そして彼らの静かで平和な生活を壊さないような形で変化してゆくことを望むばかりです。

伝統文化

私が Data-Bilang を訪れたのは3回ですが、そのうち1回はクリスマスの時でしたし、また都合2回の結婚式に立ち会うことができました。うち1回は調査対象集落内での結婚式だったのでまるまる2日間は調査が出来ませんでした。しかし、そのかわりに結婚式の準備から一緒に手伝い交流を深めることができました。その時は同時に3組の結婚がありとても賑やかでした。新婦のうちの1人は他の村から嫁いで来たのでなおさらです。Data-Bilang の住民が大勢川岸に集まって新婦の到着を待ちます。エンジンの音とともに7隻のクティンティンが上流からやってくるのが見ると同時に村の人々が歓声を上げ、新婦側もそれに応じます。新婦の船には旗まで立ててあり遠くからでも目立ちました。伝統衣装をまとった村の4人の女性(2人は未婚、2人は有力者の奥様)が新婦を迎えに船まで近づき、あとは村の人たちでつくった列の間を歩いて新郎の家まで歩いていくのです(写真-1)。結婚式の準備は数日前から始まり、調査の合間をみつけて私たちも部屋の飾りつけを手伝ったりしました。式の前日は集落全員が焼畑に行くのはやめて、モチつきをしたりブタ肉を煮たりします。皆が参加して手伝い、結婚する二人を祝うわけです。日本の農村と同じです。さて、式当日。彼らは既にクリスチャンなので式はまず教会で行われます。新郎はタキシードらしき服、新婦は白いウェディングドレスです。教会での式が終わると今度は公民



写真-1 村の女性に手を引かれて
ゆく新婦（向こう側）



写真-2 女性の踊り



写真-3 男性の踊り

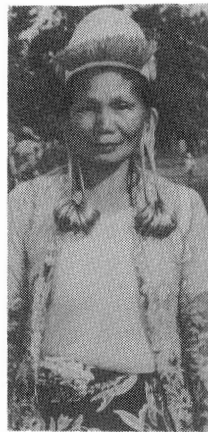


写真-4 イヤリングをした女性

館で慣習にのっとった式をやります。村の長老を代表して Kepala Adat が訓示を述べ、村長が簡単にあいさつします。これで彼らは村の皆に認めてもらったわけです。この時、新婦は伝統衣装ですが、新郎はズボンにワイシャツ、ネクタイ姿でした。キリスト教の浸透によって、もともとアニミズムだった彼らの文化はかなり変質しているようです。

夜になると新婚さんたちを祝うための踊りがありました。女性は伝統衣装、男性は普通の姿（ジーンズなど）で参加します。楽器は suring（竹笛）、jatung utang（木琴の一種）、sampeq daduq（弦楽器）という三種類が使われます。sampeq

daduq だけの曲はゆったりとして優雅な感じで, suring と jantung utang を使った曲は何とも小気味よいリズム感がありました。これらの曲に合わせて踊るのですが, 数人一緒の踊りあり, 一人の踊りあり, カップルの踊りありで十分に楽しむことができました (写真-2, 3)。一人の場合とカップルの場合は順番に指名された人が鳥 (犀鳥) の羽根でできたぼうしその他を身につけて踊るのですが, 恥かしがっていやがる人もあり,



写真-5 Kenya 族のカゴ (左から Ingan Atet, Ingan Ajou, Ingan Baq, Kiba, Banyat Suluk)

り, 日本の宴会の時を思い出しました。深夜2時頃にお開きとなりましたが, 途中で帰るべからずという習慣にもかかわらず, 少しずつ人数が減っていったのも日本の宴会と同じでした。

さて, 華やかな若い女性の伝統衣装をながめていて少々気にかかることがありました。彼女たちの着る伝統衣装は出身身分階層により異なっていたのです。もともと Kenya 族は4つの身分階層 (王族, 貴族, 平民, 奴隷) がありました。現在は解消されていることにはなっているのですが (確かに奴隷は存在しません), 村長はどの村でも必ず昔の王族出身者になります。それに子供を背負う bening (背負いかゴ) の紋様を見ると出身階層がわかるのです。さきの女性たちが着る伝統衣装しかり。王族, 貴族の場合, スカート前面にも金色の華やかな紋様があるのに対して平民の場合は紺の無地です。女性たちがずらっと一列に並んだ時, 出身身分階層が一目瞭然なのは胸が痛みました。もしかして彼女たちにとっては当然なことでも何ともないのかも知れません。あるいは, 単なる紋様の差だと割りきっているのかも知れません。しかし, 私にとっては何かすっきりしない光景でした。

話かわって, 入墨 (刺青) も彼らの特徴の1つです。若者はもうやっておられません, 老女たちは肘から先と膝から下に入墨がしてあります。色は黒に近い一色ですが, 紋様はよくわかりません。入墨についてもいろいろと尋ねるつもりだったのですが, どういうわけか聞きもらってしまいました。次年度 Apokayan へ行ったら忘れずに尋ねてみようと思います。

その他, 男女共に耳に大きな穴をあけてあるのをご存知の方も多いことでしょう。これも若者は既にやっておられません。女性の場合, 穴がかなり大きく, 肩に触れるくらい, あるいはそれ以上耳が垂れ下がっています。お洒落のときそこにイヤリングを吊るすわけです。老女ながら女らしくしかも毅然とした雰囲気になり, なかなかなものです (写真-4)。男性の場合, 耳の上部と耳たぶの2か所に穴が開けてあります。十円玉が1個かせいぜい2個入るぐらいの大きさです。彼らの鋭い目つきと耳の穴は

とてもよくマッチして、男らしさ、逞ましさを引き立てているように見えました。

彼らは籐のカゴ作りの名人です。農作業に使う何種類ものカゴからよそゆきのカゴまで、すべて自分で探してきた籐で作ります。しばしば竹を使うこともありますが、主流はやはり籐（インドネシア語で“rotan”）です。Ingan Atef（高さ1 m 近くの大きい背負いかゴ）、Ingan Ajou（収穫の時に使う手下げカゴ）、Ingan Baq（日常的に米を運ぶのに使う背負いかゴ）、Kiba（女性専用、焼畑へ行く時と薪集めの時に使う）、Kiang（男性専用、薪集め用）、Banyat Sakit Sae（年配男性用、焼畑や狩に行く時に背負う）、Banyat Suluk（若い男性用、用途は Banyat Sakit Sae と同じ）、Banyat Anyung（よそゆきのカゴ、男女兼用）と用途に合わせて作るわけです（写真-5）。紋様はそれぞれが工夫してつけています。

迷信等

この他、4か月の間に雑談の中でいくつか興味深い話を聞けたので紹介しましょう。

まずは hantu（おばけ）の話です。1つは“Jin”という名の hantu、彼は Menggeris (*Koompassia excelsa*) の木に住んでいます。目が1つで夜はライトのように光ります。彼に見つめられている時は、体が石のようになり動くことができません。もし、Menggeris を伐ると子供が死んだり、病気になったりすると考えています。ですから、Menggeris の木は伐りません。焼畑の中に巨大な Menggeris の木がそびえていることがあるのはそのためです。（Menggeris はハチが大きな巣をつくることで知られており、ハチミツを採ることができます。）

もう1つ、hantu beranak というおばけもいます。森の中や墓の近くで子供が泣くような声が出たらそれが近づいたしるしです。森の中で女性に関する話をすると、hantu beranak はやってくるそうです。それは女性の姿をしていて、目玉と睾丸を取られて死ぬといえます。神聖な森で淫らな話をすることへのいましめでしょうか。私はかわりに、日本の雪女の話をしてあげました。

次は蛇の話。東カリマンタンにはブラックコブラが住んでいます。サマリダの我家でもお目にかかったほどです。Kenya 族の人々は他の蛇は食べて皮は販売するのですが、ブラックコブラ（首から胸にかけて黄色い）は食べません。森の中でブラックコブラに出会った時は、Kenya 語で話しかけるのだそうです。調査対象集落の集落長さんは、この間イノシシ狩りの時、ブラックコブラに出会ったのでした。その時彼は蛇に「俺は今狩りをしている。生活のためだ。じゃまするな。あっちへ行け！」と言ったところ、ブラックコブラはおとなしく去って行ったといえます。彼らはブラックコブラが Kenya 語を理解できると信じているのです。

では雷の話に移りましょう。彼らの言い伝えによると雷は猫の形をしていて、あちこち自由に（天から地まで）動き回るものだそうです。日本の場合は、猫じゃなくて鬼（人間に似た姿）が雲の上に住み、たくさんの太鼓をたたいているんだと説明しました。すると彼（29才の若者）は少し考えた末、「じゃ本当のところ雷は何なんだ？」と聞いてきました。私は平常心を保ちながら電気であることを説明しましたが、わか

ってもらえたかどうか心配です。

最後は病気の治療についてです。Data-Bilang には医者がいません。そこで彼らは病気になったらとにかく体を横にして休みます。なかなか治らない場合は、店で買った薬を飲み、それでもだめな時は遠くの村から医者をお呼びそうです。しかし、いざとなったら伝来の祈禱師の登場となります。私が Data-Bilang に滞在していたある夜、遠くの方から早いリズムの太鼓の音が聞こえてきました。少し離れた隣り村で病人を治すための祈禱が始まったのです。家族が太鼓をたたき、祈禱師がお祈りをします。太鼓は森に住む魔物をお呼び寄せる働きをします。太鼓の音に導かれて魔物が来た時、祈禱師は魔物に病人を治せるかどうか尋ねます。もし治せないなら追い返し、治せるなら病人のところへ通すのです。その時の会話は他の人々にも聞こえますが、魔物の姿は見えないそうです。太鼓は病人を治せる魔物が来るか、あるいは病人が息を引きとるまで打ち続けられます。これは、彼らがクリスチャンとはいっても深層には依然としてアニミズムがあることの証拠でしょう。その夜、私が聞いた太鼓の音は2時間ぐらいで鳴り止みました。有能な魔物が来てくれたのでしょうか、それとも…。

おわりに

次年度は、彼ら Kenya 族の故郷 Apokayan の Long Ampong 村を調査地の1つにする予定です。1960年には12棟あった long house (30~80戸/棟)も今では4棟に減ってしまったそうです。どんな方法で焼畑をやっているのでしょうか。またどんな生活をしているのでしょうか。楽しみです。他に2つ、Kenya 族以外の部族で、もっと primitive な焼畑をやっている集落を探して調査する予定です。

私たちの調査では、研究の主目的から外れたことも同時に知ることができます。本稿で紹介させていただいたことはその一部です。村の人々と少しでも心が通じると調査もやりやすくなるし、その村が好きになります。槍やマンドオを向けられた頃と、結婚式の準備を手伝った頃とでは私たちと村の人の心の距離はだいぶ変化していると思います。調査自体は、実際に焼畑まで歩いて行って面積を実測したり、インドネシア語の話せない人や自分の年齢を知らない人々を相手に夜遅くまで聞き取り調査をしたりで、容易ではありません。平均して1日当たり1戸は少し無理なくらいです。最初の数人を除いてあとはむしろつらくなります。しかし、日がたつにつれて村の人との距離が少しずつ近くなっていくのは何ともうれしいものです。面接の相手に対しても単なる被調査者というのではなく、心のつながりを持つようとする気持ちで接する大切さがわかってきました。そうすれば、私たちにとってはいかに外的れでつじつまの合わないように思える答えが返ってきても、いらいらすることなく、むしろ笑顔で対応できるものです。

薪集めの時に足をくじいてびっこになってしまったあどけない少女、新婚ホヤホヤの若者たち、私たちのやっかいな質問に一生懸命答えてくれた誠実な人たち……。Data-Bilang の人々の静かで平和な暮らしが今後も続くことを祈って筆を置くことにします。